



午年に寄せて

五彩狩獵文鉢

高13.5 口径27.0 底径11.0 (cm)
中国 明時代初期(15世紀)
景德鎮窯

◇◇ 館蔵品紹介 ◇◇

今回は午年にちなんで、馬が描かれた鉢をご紹介する。狩猟の場面を表した中国、明時代の五彩の深鉢である。「五彩」は、白磁や白釉陶器の素地上に赤・黄・緑・紫色などの上絵具(釉の上から絵付けをするための絵具)で様々な文様を描き、低火度で焼きつけた陶磁器のことで、日本では「赤絵」、「色絵」と呼ばれている。特に茶人たちは景德鎮の民窯(民間の窯)で焼かれたこのような鉢を菓子器や懐石の器として珍重してきた。赤を主調とし緑や黄色が加わる華やかな彩りや、吉祥を感じさせる文様の数々は、さぞかし会食の雰囲気を楽ししいものにしたにちがいない。

表紙の鉢は口径が27.0cmと比較的大ぶりでたっぷりと深く、その高さを生かすように、側面には狩を楽しむ騎馬民族風の人々の様子がぐるりと描かれる。その図柄は以下のように4場面構成されている。(写真1 右から参照)

その1 騎馬し、これから狩りにでかけようとする5人の人物。狩り用の猛禽を連れてきた者とそれに向かい合う人物という組み合わせが2組表され、その中央に象に乗る高貴な竹まいの男性が表されている。象はインドをはじめギリシア、ローマでも戦の際に装甲車のように用いられたとされるが、ここでは「騎象」男性の特異な様子を強調し、異国趣味を感じさせるものとして描かれたのであろう。

その2 リスを追い立てる2人の騎馬人物。

その3 木影で休む4人の男性と2頭の馬。男性の一人は鷹と思われる猛禽を手にとまらせている。

その4 (表紙写真も)パルティアンショット(馬上から振り返りざまに打つ矢)で飛ぶ鳥を射落とす得意げな表情をする人物と馬上杯のような器物を高く掲げ持つ男性。(射落とされた鳥をキャッチしようとしているようにも見える。)

1～4の場面はそれぞれ独立したものであるが、

それぞれ馬や人の視線の一部が場面をつなぐように隣の場面に注がれ、画面全体に絵巻物のような連続性を与えている。周囲には紅葉し始めた木々も描かれ、すがすがしい秋のこの一日を思う存分楽しもうという画中人物たちの気持ちが伝わってくるようだ。

その楽しい気分をさらに盛り込むかのように、見込み部分の装飾も華やかである。(写真2)



(写真2)



(写真3)

内底の中心にひとつの花が描かれ、それを赤地白抜きに似た花唐草の文様帯が囲む。赤と黄の蓮弁繋ぎをはさみ、その外側に牡丹唐草が取り巻き、口縁には七宝繋ぎ地に円花文の組み合わせの縁取りが配されている。

高台側面には1本朱線がめぐらされているが、その線は、一部高台の欠けた部分の上にも描かれている。一見後補のようにも見えるが、本焼きの後欠けてしまったのを、気にせず上絵付けを行ったものらしい。民窯らしいおおらかさといえるであろう。高台内には赤色で二重円圏に「大明年造」の銘が記されている。この「大明年造」銘には素地に「嘉靖」銘を刻んだものがあるとされるがこの鉢の高台には陰刻は見られない。

(1月9日から開催の「ことほぎ」展に出品予定)

(井上 則子)



(写真1)

■ 渡辺崋山^{かざん} 筆「白鷺游魚図^{はくがゆうぎよ}」と「秋卉雙鷺図^{しゅうきそうが}」のこと

小野 恵

先日、10月30日(水)に渡辺崋山(寛政5-天保12/1793-1841)の地元である愛知県田原市の博物館から、「渡辺崋山・椿椿山」が描く花・鳥・動物の美」展にお貸ししていた「白鷺游魚図」(次頁図版参照)が戻ってきました。市制10周年、渡辺崋山生誕220年、開館20周年を記念した展覧会ということで、作品も晴れの舞台に里帰りした格好となつて良かったのではないかと思います。

この作品は、昭和15年に遠山元一(明治23-昭和47/1890-1972)の所蔵となつたもので、昭和45年の遠山記念館設立に伴い館に寄贈され、現在に至っています。題のとおり、秋の草花に彩られて、鮒が遊ぶ流れの水面に身を浮かべる真っ白な雄の鷺鳥が印象的な一幅で、沈南蘋(生没年不詳。名は詮、字は衡之、浙江省呉興の人。)、憚南田(1633~90。初名は格。字は寿平のちに正叔、江蘇省武進の人。))といった中国画家の写生画風や鮮麗な彩色に影響を受けて描かれた、崋山の花鳥画を代表する作品のひとつです。

この一幅でも充分に見応えがあるのですが、じつは元々双幅として製作されたことが分かっています。対幅は「秋卉雙鷺図」という題で、岩や秋草を背景に雄の白鷺と雌の蒼鷺(羽毛の黒っぽいもの)が寄り添い憩う構図です。(次頁図版参照)

真偽のほどは定かではありませんが、明治維新の際、この双幅は、燃えさかる会津二本松城から心ある人により持ち出され、焼失を免れたという話も伝わっています。江戸から明治、大正へと時代が移りゆく中で、しばらくは双幅のまま、ひっそりと流転し続けるのですが、じきに崋山の名品として世に知られるようになり、昭和2年、当時の所蔵者が売立を行った際、財界不況で双幅では値が張りすぎて売れない、ということで別々の箱に収められて、ついに離ればなれになってしまいました。

数名の実業家、政治家の元を経て、昭和15年3月29日に行われた入札会に出品された「白鷺游魚図」を入手したのが遠山元一です。父を早くに亡くした後、母に孝養を尽くしたことで知られる元一ですが、その母・美以(慶応2-昭和23/1866-1948)が、親孝行と忠君愛国の精神を拠り所として渡辺崋山を敬愛しており、常々、崋山の名品を所蔵したいと願っていたという、その夢を叶えたのでした。ずっと崋山の良い作品を探していたので、出入りの美術商が「白鷺游魚図」が売りに出された旨を伝えたところ、買うように、と差値なしの注文だったそうです。結果は、58,800円という高額落札でした。昭和11年竣工の遠山邸(現在の遠山記念館)の総工費がおよそ60万円であったという記録があります。その一割に迫る金額、今なら優に1億円を超えることになりそうです。

さて、少々下世話なお話になってしまいましたが、ともあれ、「白鷺游魚図」は遠山家で大切にされ続け、現在は遠山記念館所蔵の優品として知られています。それでは「秋卉雙鷺図」の方はどうなったのでしょうか。遠山元一が「白鷺游魚図」を購入して半年ほど経った頃、東京美術倶楽部(明治40年/1907年4月設立の日本最古の美術商組織)に於いて「憂国の画傑 渡辺崋山先生百年記念遺墨展覧会」が開催されています。昭和15年9月21日から25日までの五日間だけ、所蔵者の違う2幅は再び双幅として展示されたのですが、現在のところ、その展覧会が、双幅が揃った最後となっています。「秋卉雙鷺図」が現存するのかどうか、それさえも不明なままです。激動の時代のなか、戦火によって失われてしまった可能性も否定できませんが、何処かに人知れず伝世していることを切に望みます。双幅の作品は、本来、ふたつでひとつのものです。それぞれが呼応し合うはずの半身を欠いた作品は、それを知る者にとっては痛ましく



白鷺游魚図

絹本着色 掛幅装 122.9×55.2cm

落款 「臣渡邊登謹寫」

「邊靜」白文方印 「子安」白文方印

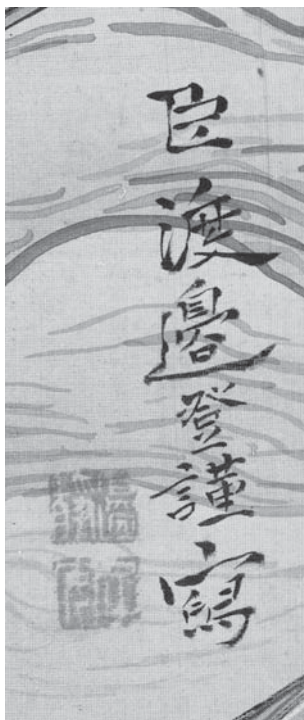


秋卉雙鷺図

図版は『美術研究』第106号より転載

さえ感じられます。いつの日か、また、2幅が双幅として鑑賞される日が来るならば、こんなに嬉しいことはありません。

お読み下さった皆様、「秋卉雙鷺図」について何かご存じの方がいらっしゃいましたら、どうか情報をお寄せ下さいますよう、お願い申し上げます。



「白鷺游魚図」落款部分

●作品関連 Data

渡辺華山(寛政5 - 天保12/1793 - 1841)

名は定静、字は伯登または子安、通称を登といい、はじめ「華山」と号したが、三十歳をすぎて「華山」と改めた。三河(愛知県)田原藩士であるが、江戸に生まれて江戸に育った。父・定通はのちに家老となったが、田原藩は世に聞こえた貧乏藩であり、多くの弟妹をかかえて華山は幼時より貧困に苦しんだ。画をはじめたのも、それが家計を助ける内職になったからである。華山ものちには家老にあげられ真剣に藩政に取り組んだが、一方、蘭学に関心を持ち、多くの先覚者とともに内外の政治、経済、国防などの研究にあたり、その中心となって活躍した。華山が蘭学に興味を持ったのも、洋画のもつ魅力がそのきっかけであった。天保十年(1839)民間の蘭学者を弾圧した「蛮社の獄」により逮捕され、藩地・田原に蟄居を命ぜられているうちに自刃した。華山は少年時代からいろいろの画家に師事して画を学んだが、最後に谷文晁の門に入った。若い時代の華山の画には、文晁や清の花鳥画家・沈南蘋などの影響がつよい。華山の名を不朽にしたものは特にその肖像画であるが、花鳥画にもすぐれた作品が少なくない。

(『遠山記念館蔵品図録』吉澤 忠氏 解説より抜粋)

制作年について

「臣渡邊登謹寫」(畏まった署名から、藩主、あるいは藩主と交流のある大名家の依頼による作品と考えられる。)という落款が、『渡辺家年譜』(重要文化財 田原市博物館蔵)の記述「文政六年癸未今歳 篤岩公逝去し玉ひ公弟八歳君橘三郎君の事也。養子とならせられ位に即き玉はる、是を碩岩公とす。備前守諱は康明公七月家督を命ぜられしに因て、同席の諸侯の内に世話をたのまる、三五名を饗せられしに、賓よりの命ありて罷出て揮毫せり。又囑せられて他日画を作りて差し出しぬ。」に関連づけられて、近年は文政六年(1823)、華山三十歳のときの制作とみられている。

(「渡辺華山・椿椿山が描く 花・鳥・動物の美」展 2013 図録参照)

ことほぎ 1月9日(木)~2月2日(日)

午年にちなんで、日本の馬の木彫(米原雲海作)から、馬を模様にした子供の着物、香遊戯盤の中国騎馬兵をコマとした呉越香、そしてオリエントからは、エジプトの騎馬戦車の浮彫りに、シリアの馬のテラコッタなど、また、ヨーロッパの狩猟文様タペスリーも圧巻です。馬の美術をお楽しみいただきます。

あわせて、日本の松竹梅や鶴亀などの吉祥文の書画工芸品を取りそろえ、初春を寿ぐ展観です。

新しい年に、早春ののどかな田園風景の中を散歩がてら、吉祥模様をことほぎ、愛でられてはいかがでしょう？



ひな 雛の世界 2月8日(土)~3月9日(日) ※3月3日(月)は開館

江戸期に開花した人形文化は、日本独自の雛人形を母体として、多種多様な人形を生み出してきました。本展では、江戸時代中期から昭和時代中期頃までの様々な人形を展示し、日本の人形の歴史をたどっていきます。

高さが60cm以上もある大型で豪華な享保雛をはじめ、丸顔で愛らしい次郎左衛門雛、江戸っ子に人気を博し、現代の雛人形のもととなった古今雛、まるで象牙で作られているかのように精巧でかつ極小のセルロイド製の「御殿雛」、明治天皇、皇后、儀仗兵、女官を表した「明治天皇御影雛」などの変わり雛の他、久保佐四郎や永徳齋、大木平蔵など、名工と呼ばれる作家たちの雛人形などを出品致します。

他にも嵯峨人形、御所人形、衣裳人形、賀茂人形①、からくり人形、抱き人形なども展示致します。

併せて会期中、遠山邸の大広間では、十畳間の座敷いっぱい飾られた雛壇飾り②もご覧いただけます。

これらは当館の創立者である遠山元一が、長女貞子の初節句の祝いとして、大正時代に揃えたもので、関東風の「段飾り」と、京都御所の紫宸殿風の館に人形を飾る「御殿飾り」の二組で構成されています。日本の人形が持つ美しさと魅力をぜひご堪能下さい。



①



②

「親子で楽しむワークショップ&ギャラリートーク」 2月8日(土) 午前10時～12時 ～投扇興遊びと展示解説～ (川島町教育委員会「地域子ども教室」と共催)

せんすを投げて的にあてる、昔のゲーム「投扇興遊び」に挑戦してみませんか。またその後は、遠山邸に飾られた遠山家のおひな様や美術館で開催中の「雛の世界」展を見学します。

お申込み：1月7日(火)より、電話もしくはメールで受付をします。

電話 049-297-0007 メール arai@e-kinenkan.com

参加対象：小学生(入場無料)と保護者です。

お子様だけの参加も可能です。参加費は不要です。



「雛祭りの日」

2月26日(水)～2月28日(金) 3月2日(日)～3月3日(月) 午前11時・午後1時半

期間中の午前午後の2回、担当学芸員が「雛の世界」展と「遠山邸」を解説します。

※3月3日は月曜日ですが開館します。

ご当地グルメとコラボレーション!

「古今雛 遠山邸2階での特別公開と郷土料理 呉汁を楽しむ会」

3月1日(土) 午前11時～



担当学芸員による「雛の世界」展及び普段非公開の2階を含めた遠山邸の解説、ご案内の後、送迎バスにより、地元川島町の郷土料理「呉汁」を召し上がっていただく企画です。

本年度は従来の内容に、遠山邸の2階で「古今雛」(江戸時代後期 高さ60cm)を間近でご鑑賞いただく機会を設けました。ご希望の方は食事の後、再び記念館にお帰りいただき、自由見学やお抹茶・お菓子などをお楽しみいただくこともできます。

参加費：2,500円(入館料、飲食代込み)

電話もしくはメールで予約受付中!(先着30名様まで)

電話 049-297-0007

メール arai@e-kinenkan.com



特別展示の古今雛

大豆をすりつぶして
汁仕立てにしたうどん
野菜もたっぷり入った
ヘルシーな郷土料理!

投扇興を楽しむ会

2月16日(日)・3月8日(土) 午前11時・午後2時 (1日2回開催)



アート♡散歩 春の巻 3月15日(土)~5月18日(日)



四季の中でも、とりわけ心躍る春の風情は昔も今も親しまれ、美術品のモチーフにも盛んに用いられてきました。この展覧会では春をテーマにした作品を中心に展示いたします。寒さ緩む早春から若葉へ、生命力溢れるこの季節をそぞろ歩^{あふ}くように、アートを楽しんでみてはいかがでしょうか？

当館所蔵の様々な分野の作品があなたのお供をいたします。



〈主な出品作品〉

- ・岡田半江筆「春鶯起鴉図」(天保12年 重要文化財 *3/15-4/20 写真右)
- ・伝 紀貫之筆「寸松庵色紙」(平安時代 11世紀 重要文化財 *4/22-5/6)
- ・英一蝶筆「布晒舞図」(江戸時代中期 17-18世紀 重要美術品 *4/22-5/6)
- ・「佐竹本三十六歌仙絵 頼朝像」(鎌倉時代 13世紀 重要文化財 *5/8-18)
- ・色絵蝶牡丹に鳥文鉢 古九谷 (江戸時代前期 17世紀 写真上) ほか東洋陶磁と漆工品
- ・日本および世界の染織品等 * 書画、染織品は展示替えがあります。

4月5月の催事のご案内

遠山邸の端午の節句飾り 4月9日(水)~5月6日(火・振)



邸宅・大広間でご覧いただく遠山家の端午の節句飾りは、鎧冑を中心に、鍾馗、応神天皇、加藤清正、金太郎など大正時代の五月人形の名品ぞろい。当主の遠山元一が、大正11年生まれの名男一行の初節句の祝いとして揃えたものです。

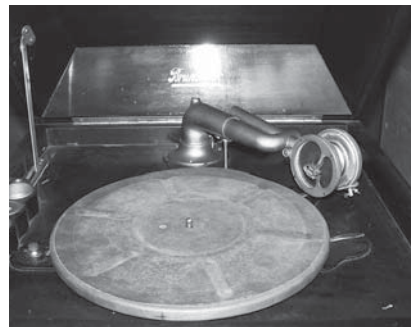
旧家の伝統的な節句飾りは、最近ではめったに見ることができなくなりました。豪華な人形たちがお待ちしております。

レトロな空間で、ノスタルジックな音楽を

●手回し蓄音機によるSPレコード鑑賞会 Part 14 日時：5月4日(日) 午後1時30分~

場所：本館大広間 先着50名様 入館料のみ

和風建築の技術の粋を集めて昭和初期に建てられた、遠山邸の大広間で、恒例のSPレコードの鑑賞会パート14を行います。貴重な記録の中から、クラシック曲からはテノールのエンリコ・カルソーを中心とした伝説的な歌手の歌声や、ラフマニノフ自作自演のピアノ曲などを、その他では、童謡や、唱歌などを聴く予定です。電気を一切使わず再生されるノスタルジックな音をお楽しみください。なお、ご自宅に、SPレコードをお持ちの方は、当日お持ち頂ければ、飛び入り再生も受け付けます。



暮らしと建築の美—遠山邸研究会— セミナーのご案内

遠山邸研究会は、平成23年11月の初回からこれまで6回にわたって、建築学研究者と建築家の先生方に講演をしていただきました。

近代和風建築である遠山邸の文化財価値についてばかりではなく、モダニズム建築の保存の問題、大震災以後の日本建築の方向性を論じられた内容まで、聴講の参加者に新鮮な感動を与えていただきました。みなさま、建築の面白さ、素晴らしさを再確認されたことと思います。



第1回 宗本順三氏のご講演

来春の平成26年5月から、再開をする準備をいたしております。和風建築を実際に建てる数寄屋大工、左官職人の繊細な技と知恵、そして建築材料を提供する材木商の方から良材を選びすぐる眼など、普段は聞くことのできないお話をうかがうことができる会にしたいと思います。春の講演会の予定は、以下のとおりです。ご参加の申し込みをお待ちいたします。

第7回 講演会 5月10日(土) 午後1時30分開演

講師 数寄屋大工棟梁 中村 義明 氏 「木造建築物の現代的意義」

中村義明氏は、日本を代表する数寄屋大工 中村外二工務店の2代目で、現在国内外で茶室や伝統建築を数多く設計・施工されています。

第8回 講演会 6月7日(土) 午後1時30分開演

講師 左官 久住 章 氏 「遠山邸の塗り壁」

久住章氏は、カリスマ左官と呼ばれる職人さん。何人もの親方のもとで修行されて独立、左官として始めて1999年に日本建築学会文化賞を受賞されました。

【申し込み方法】 定員80名(先着順)。電話(049-297-0007)か、専用メール(tkkk@e-kinenkan.com)宛にご予約をお願いします。講座料300円と、別に入館料700円が必要です。

* * *

第1回から第6回までの貴重なご講演の内容を記録するため、現在、講演録の編集をしております。来春の発行の予定です。講師の先生方のお名前とタイトルを上げておきます。

第1回 宗本 順三氏 「遠山邸と京都東山邸宅群建築—数寄屋邸宅建築の粹—」

新見 隆氏、山本 三千子氏

「遠山邸座敷に飾られた本日の室札について」

第2回 鈴木 博之氏 「近代和風建築と遠山邸」

第3回 松隈 洋氏 「地域資源としてのモダニズム建築—その歴史と現代的意味について」

第4回 隈 研吾氏 「場所の力」

第5回 江面 嗣人氏 「床の間等にみられる日本文化と文化財保護」

第6回 伊東 豊雄氏 「地域の力がこれからの日本をつくる」

講演会のお話をいま一度味わいたい方、講演を聴けなかった方、是非ともご覧になっていただきますよう、ご案内いたします。

お知らせ

●遠山邸の2階の特別公開



遠山邸の2階の部屋は、昭和11年竣工当時の姿をそのままに、あたたかも主である遠山元一の帰りを待っているような静かな佇まいを見せています。

普段は非公開ですが、下記の日程で特別に公開いたします。洋式の応接室と寝室の2部屋には、1階の伝統的な和の座敷とはことなる独特の雰囲気があります。また、庭全体を見渡せる眺めのよい座敷も1部屋あります。是非、お楽しみになってください。

4月12日(土)、5月17日(土)、
6月14日(土)
午前11時より午後3時まで



●遠山邸の解説案内

遠山邸が建てられた経緯や規模、連結する3棟の特色と座敷それぞれの意匠の違い、見所などを、1階を順に巡りながら解説いたします。

毎週日曜日午後1時より

また、2005年からお願いしております解説ボランティアの秋山裕子さんの案内も、熟練の9年目に入り、リクエストもいただいています。

土曜日を中心に月3回



利用案内

入館料 大人 700円 学生 500円

中学生以下は無料

(団体20名以上は2割引となります)

交通 ●東武東上線・JR埼京線▶川越駅

●西武新宿線▶本川越駅

●JR高崎線▶桶川駅

川越駅-桶川駅間の東武バスで牛ヶ谷戸下車、徒歩15分

●開館 午前10:00～午後4:30 (入館は4:00まで)

●休館 月曜日 (祝日の場合は開館、翌火曜日)
年末年始、2月4日、3月11日、4月8、5月8日

●美術館のみ展示替え休館

2月5日～7日、3月12日～14日、
5月20日～23日

●詳しい展覧会情報は下記をご覧ください。

URL <http://www.e-kinenkan.com>



遠山記念館だより 第46号

2013年12月 発行

編集発行 公益財団法人遠山記念館
編集担当 久保木彰一

〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675

TEL 049-297-0007

FAX 049-297-6951